

そこで本発表では、気吹舎とその門人(常世以外)がどのようにに堀を評価していたかを出発点とした。気吹舎日記中の安政四年六月条には、堀が水戸藩へ取立てられる際に平田鍊胤が仲介していたことが記され、その子延胤は「堀は篤学謹行之学」と評価したうえでこのころすでに講説の力量も高く評価されているとしている。また安政五年以降と考えられる書簡には、門人何某が堀の著作である『醜の御楯』を読み、堀に興味を持ち問い合わせている。また『醜の御楯』は気吹舎門人が待ち望んでいた「武学本論」に先んじて著された書と映ったようである。

次に堀の古典解釈について『古伝顕幽考大綱』から分析した。彼は「古伝」には「三段ノ御依」と「十段ノ顕幽」があり、それは「経」と「緯」であるとした。そしてこの「顕幽」の世界観の中で、万物起原を「根国」(地中)に求める説をとる。このことは後の宣教使において教義確立の際に問題となる。『泉國所在説略附紙答』(國學院大學所蔵、明治三年)には当時宣教使であった堀と伊能穎則の問答が記されている。そこにはヨミは地中である事を主張する堀と、月であることを主張する伊能の対立が記されている。それと同時に、古典解釈(神道思想)から国民を教化しなければならないという共通の理念も見出される。

堀をある種の教育者として着目した研究に岡田哲「幕末の神道講師堀秀成」がある。この研究をもとに嘉永期の『満奈肥廻則』から分析した。これは富樫広蔭の私塾言幸舎の「学則」を模倣したとされるが、その附録には堀自身の経験から作成した学問階梯が示され、同学後学の者への道標としている。また、

安政四年『醜の御楯』は、水戸斉昭へ提出した武士の心得を書いたものであるが、その内容には武士のみならず庶民にいたるまで学問を修める必要を説く。そして明治期の建白書では、「巡教諭使」という大宝元年の明法博士を典拠とする使節を設け、都鄙に拘らず「御一新」の趣旨を理解させるべきとした。

以上、堀秀成の思想と行動に関して、平田派国学者の視点を出発点として概観してきたが、常世の言説以上のものが示されたように思われる。特に講義に関して「上手」であったのは、長年にわたり講義を継続してきたからであり、その結果水戸藩士の目にとまることとなったと考えるべきであろう。また、明治二年の建白や宣教使期の言説は、これまで平田派の独断、もしくは平田派と津和野派の対立として捉えられがちであった明治維新政府による神祇・宗教政策に関する研究に新たな示唆を与えてくれるものと思われる。

宮地神道とは何であったのか

黒田 宗篤

宮道東夫の『玄学のガイドライン』シリーズ(玉廻舎塾)が出版されて以来、従来の「宮地神道」や「宮地神仙道」といった概念は、再検討を要するものとなった。これらの概念は、友清歆真、清水宗徳等といった新興宗教団体の組織者が、高知県潮江天満宮の神主職(宮司)世襲家の当主であった宮地常磐、再来(ヨリキ)父子と高知城内八幡宮社家の当主・宮地嚴夫の三氏の数ある著作の中から特に玄学研究に注目して、彼ら独自の解釈を付したものに由来するものであり、実際の三氏の思想

や活動を正確に反映するものではないとの結論が出されている。本報告では、宮道の論考を踏まえて、最低限史実として確認できる宮地三氏の実績について、彼らの学術面に注目して検討を行うことにする。

宮地常磐は、幕末までの期間に家学、吉田神道、鹿持雅澄の国学、平田国学、伯家神道を学んだ。彼は幾つかの著作を残したが、翻刻を含めて現存が確認できたものは、『万葉集品物図絵』、『石鎚神社考』、『家訓』一軸、『潮江村誌』(昭和四年)に一部引用されている地誌に相当するもの及び聞書の『異境物語』のみであった。一通り学問を終えた常磐は、『石鎚神社考』(明治二年)を著し、その中で仏教排斥論を唱えつつ、鹿持雅澄、本居宣長の系譜に属する国学研究を行っている。よって学者としての常磐は、「国学者」として位置づけるべき人物であったことが明らかとなった。

宮地再来は、家学、吉田神道、文学、漢文、書道、歴史、易暦、医学を学び、文学、神道、玄学、儒教、仏教、医学、天文、地理、暦、鉱山、昆虫、植物等を専門分野とした。

彼は、生涯で二百五十種、約五百冊の著作を成したとされているが、その大部分は焼失し、全容は不詳である。ただし、宮地竹峰(『土佐史談』第七五号、四二―四三頁)及び藤原栄有(『宮地神道大系』第一巻、五二―五五頁)が作成した慶応三年から明治二十二年までの著作リストが存在しているので、その期間だけは書目から研究動向を把握できる。

百科の才といわれた再来は、基本的に複数の専門分野を学際的に幅広く研究している。著名な玄学研究は、平田篤胤が自得

を求めた秘訣の解明が主であり、それは主に明治十年からの十年間の間に集中している。明治十年代後半からは、本居宣長の『古事記伝』、平田篤胤の『古史伝』、鈴木重胤の『日本書紀伝』につぐ、『古語拾遺伝』六十一冊の執筆を開始し国学者としての大成を図った。その後、貝原益軒の『続和漢名数』の続編の執筆を手がけて博物学、物産学、名物学の分野にまで研究範囲を拡大した。よって、再来の場合、玄学者、国学者といった範疇でおさまるような学者ではないことは明らかである。

宮地嚴夫は、在世時にあって自他共に認める平田篤胤の後継者であった。彼は、当時「迂遠論」と化していた平田国学に社会進化論を導入することで再活用を試みた。それは、平田国学の研究手法及び主精神を残しつつ、世界各国の人々が将来にわたって受容可能な神道説を樹立するというものである。彼は、自身の計画に基づき百数十にのぼる講演録を残し、それに生涯を捧げた。無論、宮地嚴夫の活動は、この他にも教育、文化、芸術、時事評論、歴史研究など多岐にわたっており、玄学者、国学者の範疇で捉えるのは誤りである。

結論として、三者が三様の活動を行っており、彼らの活動は、「神道」、「神仙道」に限定されるものではない。寧ろ、多様であったというべきであろう。三者が共通して終始一環主張していたのは、敬神、愛国、尊王及び忠孝であった。

以上の調査結果により、宮道説には妥当性があり、従来の「宮地神道」及び「宮地神仙道」といった概念で宮地三氏を評価するのであれば、三氏の正確な実態を反映した事にはならない。よって、定義の修正が必要であると結論する。